

米国チベット仏教学者訪問記

小谷 信千代

一九八三年九月二二日に大阪空港を発つて約四十五日間、アメリカ各地の大学を訪ねて旅をした。その折に訪問した仏教学者たちは主としてインド仏教及びチベット仏教を専門とする人々であったが、インド仏教学者のことに關しては別の機会（大谷大学真宗総合研究所発行『研究所報』No. 9）に触れたので、今はチベット仏教学者たちのことを述べたい。

アーマースト・カレッジ

一〇月一七日午後一時一五分、ボストンのサウス・ステーションからアーマーストに向うバスに乗る。ハゼに似た灌木が鮮かに紅葉した丘陵を眺めつつ、三時間足らずで目的地に着く。バス停の傍の公衆電話でサーマン教授(Robert A. F. Thurman)に到着を告げ、ホテルの所在を訊ねる。教授はバス停から百メートル程前方に見えているジェフリー・インを予約してくれていた。ジェフリー・インはかなり大きな木造の瀟洒な建物で、丁度紅葉の季節に当たっているために多くの観光客が泊っている。アーマーストは内村鑑三や新島謙が留学していた地として日本で

もかなり知られており、そのせいか日本人の老夫妻の姿も見られる。

夕食後しばらくしてフロントに迎えにきてくれた教授と初対面の挨拶をする。一九〇センチを優に越す偉丈夫、よく響く声、交通事故によって義眼にした片方の眼、手入れをしない頭髮、それらに一瞬圧倒される。しかしそういう第一印象とは裏腹に、天真爛漫とさえ言えるような性格の持主であることが後に分った。教授の住いはホテルから歩いて五分ばかりの所にある。石油ショック前に建てられた木造三階建ての広大な教員宿舎である。サーマン夫人によると、アーマースト・カレッジ（二年制、学生数千五百）はこのような宿舎を七〇戸も建てたが、最近では経費が高むので持て余し気味とのこと。

教授はこの宿舎を仏教研究所 (American Institute of Buddhist Studies) として半は公開している。その三階は教授とこの研究所に来る青年たちによってチベット寺院風に改造され、祭壇の上には釈迦牟尼の像と、第一四世ダライラマの写真が安置されている。私が訪れた時は、インドから一年間の予定で招請されてアーマースト大学で教鞭をとっているタラ・トゥルク・リンポチェ (Tara Tulku Rimpo che) が二階に弟子と共に滞在していた。

タラ・トゥルクはゲールク派の高僧である。師は大学で週に三回サーマン教授の通訳で授業を行う。そのうち二回はチベット仏教の教義と僧院の制度に関するもので、他の一回はキリスト教神学者との対話形式の授業である。しかし大学での授業

よりも、サーマン教授宅のチベット寺院において、より程度の高い講義が行われる。

私が訪れた夜も三〇人程のアメリカ人青年男女が聴講に来ていた。講義は毎週三回、午後七時半から九時過ぎまで行われる。菩提道次第 (*lam rim*) の講義が二回と、阿毘達磨の心所説の講義が一回である。七時過ぎから三階のお寺に集まった聴講者たちは、各自小さな座蒲団を持って思い思いの所に座を占める。カセット・テープの準備をする者、前の時間の講義のノートを見直している者、話しをしている者。サーマン教授も録音の準備をしている。やがてターラ・トゥルク比丘が祭壇の前に坐ると、聴講者たちはめいめい合掌敬礼して座に着く。サーマン教授の導師でチベット語の短い經典が唱和され、講義が始まる。

ターラ・トゥルク比丘は終始柔和な表情で、時折ジョークを交えつつ或は菩薩道の階程を或は阿毘達磨の教義を諄々と説くそれを傍に坐っているサーマン教授がよく響く声で通訳する。サーマン教授は六年間にも及ぶインド留学中にチベット寺院で出家し、一年間比丘の生活をした経験を持ち、その流暢なチベット語会話は当時既にチベット人たちの間で定評があった。教授の美事な通訳ぶりには驚嘆したけれども、一体比丘の講義の何が青年たちの興味をひくのか。聞けば四、五人の大学生を除く聴講者の大半は近隣の町で働いている人々であるという。或る者はノートを取りつつ、或る者はまるで瞑想に入っているかのようにして、それぞれ熱心に聞き入る青年たちをまのあた

りにした時、一種不思議な想いに襲われたものである。

サーマン教授の近年の研究の一端は左に掲げた論文によって察知されよう。

Buddhist Hermeneutics (*Journal of the American Academy of Religion*, Vol. 46, No. 1)

*The Holy Teaching of Vimalakirti* (University Park, Pennsylvania State, 1976)

*The Politics of Enlightenment* (*Lindisfarne Letter* 8, New York, Lindisfarne Association, 1979)

Guidelines for Buddhist Social Activism Based on Nāgārjuna's Jewel Garland of Royal Counsels (*The Eastern Buddhist*, New Series, Vol. XVI, No. 1, 1983)

(ツォンカバの了義未了義善説心髓の英訳 *The Essence of the Eloquent* は目下印刷中)

## バージニア大学

アマーストからボストンに戻り、ワシントンで乗り換えてシヤロッツビルという小さな空港に向った。そこには、バージニア大学のジョー・ウィルソン教授が出迎えるに来てくれているはずである。ボストンを発った時点で飛行機は既に二十分ほど遅れていた。ワシントン空港に着いた時には、六時五分発のシヤロッツビル行きは既に飛び発ってしまっていた。次の便は九時五分。もう教授が迎えに来てくれているかもしれない。果してうまく連絡がつくかどうか、とにかく空港のアナウンスで

伝言を頼むことにする。シャーロットビルに着くのは一〇時頃になるであらう。夜道を、しかも雨の降る中を再び迎えに来てもらうのは、初対面の教授にあまりにも申し訳ない。

一時間程して教授の家に電話をして、空港からホテルまでの道を訊ねる。彼は知らない土地で夜遅く疲れているのだから遠慮はいらない、と言って、再び迎えに行くと言う。実際、その田舎町の寂しい空港に着いてみて、彼の言葉に従っておいでよかつたことを身に滲みて感じた。

実はバージニア大学にはジェフリー・ホプキンス教授に面会の問い合わせをしていたのである。ところがホプキンス教授はこの一年間、カナダのブリティッシュ・コロンビア大学に客員教授として招かれており、ウィルソン教授が代わって授業をすることになっていた。彼の手紙には、彼も私と同様チベットの唯識を研究しているので是非会いたい、とあった。

彼の名前すら知らなかった私は、ホプキンス教授のいないバージニアまで行くことをためらっていた。そんな折に CISHAN (国際東洋学会議) に参加する為に来日中の E・G・スミス氏に会った。スミス氏は周知の如く、アメリカ政府の経済援助の下にインドにおいてチベット文献の影印出版を行っている責任者であり、現在最もチベット文献に精通している一人である。訪米を直前にして、彼からアメリカのチベット学者たちに関する情報を得ることができたのは大変幸運なことであった。氏の言葉に従ってウィルソン教授に会うことに決めたのである。バージニア大学は学生数一万人のアメリカでは中規模の大学

である。独立宣言の起草者の一人トマス・ジェファークソンの設計になる蛇行した煉瓦塀の間を通って校舎に入る。

ウィルソン教授の授業を聴講する。大学院生二人と最近ウィルソン教授と再婚した南アジア研究所助手のダイアン・シヨートとが出席している。テキストはセルチエ学堂の論理学の教科書 (*yul yul can dan blo rig gi nam par bsad pa*) を用いて仏教論理学の基礎を学ぶ。この教科書は問答形式になっているので、授業の後半ではそれを暗記して、教授が質問し学生が答えるという仕方である。チベット語会話の練習をも兼ねた勉強をしている。概してアメリカのチベット仏教学者たちには、最終的にはチベット人ラマから直接教えを受けなければならない、という意識が強く、それ故チベット語会話に対する関心も高いように思われる。チベット寺院で編纂された教科書 (*Yig cha*) を、チベット仏教の教義を理解するためにだけでなく、現在チベット語会話の学習のためにも用いるという仕方は後に述べるようにおそらくジェフリー・ホプキンス教授によって考え出された方法であろうが、それがバージニア大学のチベット仏教学の一つの特徴となっている。

チベット寺院で用いられる教科書は、アメリカではイエール大学図書館に最も多く収集されている。バージニア大学は、それ以外のチベット文献の収集に関しては、現在この国で最もよく整っていると言えよう。チベット仏教を専攻している大学院生の数も一一名に昇る。

最近のウィルソン教授の関心は、先に触れたようにチベット

の唯識学の研究にある。チャンキヤ(Tsan kya)の著作に現われる瑜伽行説 ションカバ(Tson kha pa)の『意と阿頼耶との難解の個所を釈する善説の海』(Pek. ed. No. 6149)とそのGün tanの註釈書などが目下の研究対象である。最近の論文には次のものがある。

Chandrakirti's Sevenfold Reasoning: Meditation on the Selflessness of Persons (*Library of Tibetan Works & Archives*, Dharamasala, India, 1980)

### ブリティツシュ・コロンビア大学

バンクーバーの空港からリムジンバスに乗ってホプキンズ教授が予約しておいてくれたボスマンズ・ホテルに着く。教授に電話をして翌日(日曜日)の午後二時に彼の家で会う約束をする。

当日は朝九時頃にホテルを出て、地図を頼りに教授の家の方向へ時間の許す限り歩いてみることにする。イングリッシュ・ベイに沿って砂浜の公園が続く。日曜の朝で人通りもあまりなく、小一時間程歩いても時たま散歩をしている老人やジョギングをする若者に会おう程度である。沖のほうで太陽の光りを浴びつつ先程から停止し続けているように見えるヨットの一群。白と黒の毛並みが美しい二頭のハスキー犬を連れて散歩している青年。昨日までの飛行機を乗り継いでのあわただしい旅行がなんだか他人事のように思える。

途中開いている店を覗く。カナダ・インディアンの工芸品を

売っている。黒い柔らかな石にトータムボールのようなものを彫刻した Argillite。アザラシの牙を白熊やアザラシの形に彫刻した Wolrus-task.

昼食後半時間程休憩してそのまま歩いてホプキンズ教授宅まで行くことにする。二時過ぎに着き、挨拶を済ますや否や、今日はこれからチベット医学の講演があるから大学の Asian Center に行こう、と言う。教授の車に乗せられて会場に着くと、四〇人程の人が来ている。講師はニンマ派の比丘のようである。ホプキンズ教授は、デーシー・リンボチエ(E・G・スミス氏の師)の弟子に当る人ではないか、と言う。通訳はチベット人の青年(この数日後に彼をバークレー大学の近くで見かけた)。この青年は長くアメリカに住んでいるようできれいな英語を話す。時々身体の部分を指す英語が分らなくなるとホプキンズ教授に救いを求める。後で教授は、通訳が訳ねたのは分らないからではなくて自分を試すためだろう、と言って笑った。そういう所に教授の性格がちらりと出たりする。

夕食をしてゆくように言われて再び教授の家に戻る。教授はつい五ヶ月前に再婚したばかりだが、夫人の母親が病気で彼女がその看病に行って留守のため、彼の学生(Gareth Shawham, 三〇代半は頃の男性で、教育の大半をインドのチベット寺院で受けたという人、Thub bstan thar dödö というチベット名を持つ)が身辺の世話をしている。

夕食後教授からチベット仏教を学ぶようになった動機を聞いた。それはサーマン教授の場合と非常によく似ている。年齢も

ホプキンス教授が四三歳、サーマン教授が四二歳と近く、共にハーバード大学の卒業生である。そして最近のアメリカでは特に珍らしくないことかも知れないが、二人とも離婚、再婚の経歴を持っている。しかも二人ともゲイ・シェ・ワンギャル (Ge she dhan rgyal) に師事し、彼の影響によって仏教に興味を持つようになった。

一九六二年アメリカに亡命したゲイ・シェ・ワンギャルは、文字通り自らの手でチベット寺院を新たな地に築かねばならなかった。青年ホプキンスもラマ僧を手伝って毎日力仕事に明け暮れた。ラマ僧にはアメリカの青年をひきつける何かがあった。気がつけば、ラマ僧と共にアメリカにおけるチベット仏教の開教事業に携わっていたわけである。

現在ホプキンス教授はこのブリティッシュ・コロンビア大学で客員教授として教鞭をとっている。彼は月曜日にまとめて四コマ授業をする。それを全て聴講してみた。その内の二つは彼の著書 *Compassion in Tibetan Buddhism* (London, Hutchinson, 1980) と *Meditation on Emptiness* (London, Wisdom Publications, 1983) をテキストにした大学院クラスの講義であり、もう一つは *Religions of the World* という講義題目の一般教養科目的な授業である。残りのもう一つは大変おもしろい授業であった。それを少し説明してみよう。

前にも少し触れたように、ホプキンス教授はチベットのセラ寺院のチェバ学堂で用いられた問答形式の教科書を用いて、学生にチベット仏教の教義と現代チベット語とを同時に習得させ

ようとする。学生は教科書の問答の筋道を幅三〇センチ、長さ二メートル程の紙に図式化して書き出し、それを二人一組になってまるでドラマの台詞を覚えるようにしてチベット語のままで暗記する。八組ほどあるペアーの中には、もう暗記してしまつて模範問答を買って出る組まである。時間の終りに教授は、バスの中でも路上でも問答をやつて来週までには必ず覚えてくるように、と注意を与えたりしている。

ホプキンス教授の最近の著述には前記の二著以外に次のようなものがある。

*Yoga of Tibet* (London, George Allen and Unwin, 1981)

*Tantric Practice in Nyingma* (London, Hutchinson, 1983)

*Meditative States in Tibetan Buddhism* (London, Wisdom Publications, 1983)

*Emptiness Yoga and Teachings of His Holiness the Dalai Lama* の二著は Ithaca, Gabriel Press より印刷中)

サーマン、ウィルソン、ホプキンス、三教授ともチベットの仏教やラマに対して大変敬虔な気持を持っている。それが時にインド仏教の研究者たちから、無批判でありにも宗教的である、と批判されたりする。しかし彼らのラマに対する献身的な態度から、アメリカのことはさておき、今や日本においても無くなつていきつつある仏教の学び方、多少大仰ではあるが、先学の回想の中でしか出会うことがでなくなつた仏教者の生き方のようなものを感じたりしたことである。